

子供の心をつかむ (下)

アンディ美湖

これまでの伝統的な教育制度は、どこかがひどく狂っています。一流の学校へ行くことが出来るのはたった20%の子供達です。(あとの80%の子供達はこのシステムの中、成功者とみなされるのでしょうか) このようなシステムの中では一人一人が持っている特性や才能は、ほとんど無視されてきました。子供達は、使命感よりも、劣等感に陥るばかりです。親には、これを変える力が備わっています。

子育てにおいて一番大切なもの・・・それは、子供の心をつかむことだと私は思います。これには大切なポイントが二つあります。一つめは、(前回挙げましたが) 親の私達は子供達を理解してやらなくてはならない、ということです。(神様は私たちの頭の髪の毛の数さえもご存知なのです。ルカの福音書12:7) そして、二つめは、子供に対し、喜びを持っていないといけない、ということです。(神様は私達をご自分の宝の民とされました。申命記7:6) 親がしてやれることで、子供の心に一番深く残るものとはおそらく“(____ちゃん)の気持ち、) わかるよ。(____ちゃん)って) スバラシイ!(すごいな!)(いい子だ!))”と、聞きながら育つことにあると思います。これは、子供の心を守り、類別社会の荒波に立ち向かう力を子供に与えてくれるのです。

“子は宝”という言葉は、もう最近ではあまり使われなくなりました。現代の子供達は、そんな社会の中で、必死に生きているのです。悲しいことに、日本では、子供というものは、喜びというより重荷になると考えている人が大勢います。出産率は1999年に過去最低を記録しました。何故でしょう? 養育費を心配されているのかもしれませんが。子供を公立の幼稚園から大学にやるまでにかかる教育費は、10,200,000円と言われています。(ちなみに、私立の幼稚園から博士号まで行くなれば、48,200,000円とのことです。) または、子育ては大変だと思っておられるのかもしれませんが。最近のアエラ調査によると、45%の人が“子育ては損”だと答えています。さらに、嘆かわしいことは、多くの子供達が虐待されているということです。インターネットマガジンのアビバによれば、去年の日本での児童虐待は、おとしに比べて、70%も増しているとのことです。

それだけではありません。多くの子供達が、羞恥心に傷つきながら生きています。恥ずかしい思いをさせると(刺激、動機づけになり)やる気につながるということで、子供をしつけるのによく使われています。実際、日本では、これが最も効果のある方法と考えられている、と言っても過言ではないでしょう。しかし、これは、使い方を間違えると、子供の心に非常に悪い影響を及ぼします。これは、多くの問題の原因となっているのです。依存症などもそれから来ています。依存症によって羞恥心から来る心の痛みを和らげようとするのです。過食症、拒食症なども

これが原因となっています。拒食症で苦しんでいる少女達は、意のままに食べたものを吐けるまでに、自分の体を壊してしまえるのです。その行為は、自分の命さえ奪ってしまうこともあるのです。子供に羞恥心を植え付けることは、文字通り彼らの人生をめちゃくちゃにしてしまうこともあります。私達の多くは羞恥心をモチベーションにして育ちましたが、親として、私達は、子供に別の方法を探し出し、やる気が起きるように導いてあげなくてはならないのです。恥ずかしい思いをさせて、ではなく、愛をもって、です。実際にご自分で経験されたことのない方にとっては、これは、一からの学び直しを意味するものかもしれません。

無条件の愛というのは、受け容れているということ、常に相手に伝えます。親が自分の子供は素晴らしいと思っているなら、口から出る言葉は次のようなものでしょう。“大好きよ。信じているよ。あなたならできるよ。誇らしいよ。応援するよ。一緒にいたい。”これらの言葉は、神様の心にとっても近いものがあるのです。

メリーランド州、ボルティモアのスラム街でなされた研究の記事を読んで驚きました。大学の社会学のクラスが、このスラム街で育った将来の希望の薄い男の子200人の状況を調査してみたところ、この子達が世に出て成功するチャンスは“ゼロ”、彼らの将来は暗い、といった結論が出されました。ところが、25年後、この研究報告を手にした別の教授が、そこに出された結論が本当に当たっているかどうかを調べようと、既に成人した当時の子供達を探し始めました。180人が見つかったのですが、その結果に教授は驚かされます。なんと、176人が、普通以上の成功を収めていたのです。何故かと尋ねたところ、その多くが、“ある先生がいて…”と答えました。どんな先生か知りたいものだと、教授はその先生を探し出して、秘訣を尋ねました。先生はニコリと笑って、一言いいました。「あの子達を心から愛していたんです。」

私の家族は1947年に日本にやって来ました。父はユニークな働きをなして、成功の実を結び、日本の歴史上、指折りの優れた宣教師だと言われています。特に、父は心から日本の人々を愛し、信じていました。アメリカに戻っていた時も、日本からやって来られる方に会うともなれば、小踊りせんばかりにエキサイトしました。父に愛されていることを知っている人々は、父のためなら、ほとんど何でもするというくらいでした。(愛というのは、ものすごいモチベーションになります。) 父が18年前に天に召された時、マウイで開かれた追悼式で、日本から数人の牧師先生が来て、お証しをしてくださったのですが、興味深いことに、そのおひとりおひとりが、父が一番愛してくれたのは私だと言っておられました。父は、彼らの心をつかんでいたのです。

子供を喜んでいる様子をよく表している箇所が聖書にあります。イエス様が受洗された時、父なる神様は、もう黙ってははいられないかのように、天のヴェールを開き、耳に聞こえる声で、こう宣言されました。“あなたは、わたしの愛する子、わた

しはあなたを喜ぶ。” イエス様は、この言葉を心に抱いて、まっすぐに40日間にわたる（悪魔の）誘惑の時へと立ち向かって行かれました。イエス様は、この父からの言葉を、いついつまでも大切に心に抱き続けることでしょう。また、旧約聖書でも、息子のヨセフを非常に喜んでいられるヤコブの姿を見ることができます。ヤコブは我が子ヨセフを心から愛し、その愛のしるしとして、美しいそでつきの長服を作ってやりました。もちろん、子供への喜びを周りの人みんなに見せなくてはならない、というわけではありません。ただ、子供というのは、自分の親が、実はかなりの“親バカ”なんだということを知っておく必要があるのです。

現代の世の中、あなたの子供を破滅に導こうとする魔の手がうごめいています。親と子の心が通じ合ってしまうことを、敵は忌み嫌っています。その敵から子供を守るためには、自分は本当に親に喜ばれているんだということをお子にわからせ、確信させるのが一番です。今、子供達の心に植えつける言葉の数々は、彼らの人生の土台となります。さらには、次の世代、彼らの子供達の人生の基盤を築いていくのです。

忘れることのできない証しがあります。メアリー・アン・バード、自分を愛してくれる人なんていないのではないかという疑問を心に抱えて育った少女です。

“自分は他の人たちと違う”ということをおもい知らされながら育ちました。嫌で嫌でしかたがありませんでした。口蓋裂を持って生まれたのです。小学校に上がった時、他の子は私が彼らの目にどう映っているかをあからさまに言いました。割れ唇、よじれ鼻、ねじれっ歯、変なしゃべり方……。

“その唇どうしたの？”と聞かれると、“転んで、ガラスの破片で切っちゃったの。”と答えていました。ケガでこうなったと言った方が、持って生まれた、生まれつきだと言うより、ましに聞こえました。家族（両親）以外に私を愛してくれる人なんて絶対いないと思っていました。

こうして二年生に上がりました。担任はレナード先生。みんなから慕われているレナード先生は、背が低くて、丸っこい体をし、明るくて、あったかい女性でした。

毎年、学校で聴力検査があるのですが、レオナルド先生は、クラス全員の検査を担当してくれました。生徒が一人ずつ戸のそばに立って、片方の耳をふさぎます。レオナルド先生は机のそばに座って、ささやきます。“空が青い。”とか“それ新しい靴？”などといった類のものです。

私の番になりました。戸のそばに立って、先生の言葉を待っていました。聞こえてきたその言葉は、私のその後の人生を変えました。神様ご自身が先生に与えてくださったものとしか思えません。先生はこう言ったのです。「(メアリーちゃん) あなたが、私の子供だったらよかったわ。」

私達の心の中にも、こんな言葉を待ち焦がれている幼い子供の部分があります。私達自身はその言葉を聞かずに育ったかもしれません。でも、子供達にその祝福を与えることはできるのです。全く完璧に子育てできる人なんていません。でも、うちの家庭ではこうするんだ、と心に決めて、子供に「_____ちゃんのこと理解しているよ。_____ちゃんって素晴らしい！（すごいな！）（いい子だ！）」と言葉がけすることはできるのです。そうしてこそ、子供は心を開き、心の奥深くしまっている大事なものをを見せてくれるのです。

(訳 : Matsuda Taeko)